

<特別寄稿> 国際シンポジウム 於 一橋大学 2010年12月9日

「The Human and the Social」 海外ゲストからのメッセージ

訳者序文

一本寄稿について

深海 菊絵*

2010年12月9日、国際シンポジウム The Human and the Social のゲストスピーカーとして来日した人類学者、アンマリー・モル (Annemarie Mol)、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ (Eduardo Viveiros De Castro)、ヘオニック・クォン (Heonik Kwon)、キャスパー・ブルーン・イェンセン (Casper Bruun Jensen) の4名を一橋大学に迎え、ワークショップが行われた。このワークショップは、最先端の研究を展開する海外ゲストと日本の若手研究者（院生含む）が自由に議論することを目的に企画されたものである。ワークショップでは、ゲストを4つの教室に迎え入れ、ゼミ形式で進めることが試みられた。参加者は各教室につき20名を上限として事前に募集され、それぞれの部会には司会進行役が設けられた。

参加者全員がアイコンタクトすることのできる空間。アットホームな雰囲気。議論の途中で沸き上がるちょっとした笑い。数秒の緊張感。ワークショップは、大ホールで行われた前日のシンポジウムとは違った魅力をもっていた。小さな教室では、ささやかなことがシェアされ、また、反応は常にダイレクトである。たとえば、私はモル氏の部会に参加していたのだが、私たちが少しでも理解していないと察すると、氏は話すスピードを緩め、言葉を換え、事例をだし、モノを使った。そして氏に問いかける時、私たちもそのようにした。こうした自然な配慮を伴った対話は約3時間におよんで繰り返された。この対話のなかで得ることのできたなにかは、想定していた以上のものであった。

このように感じたのは私だけではないようである。ワークショップ終了後に催された懇親会では、多くの参加者から「刺激的であった」などの良い反響を耳にした。同時に、「他のゲストのトーク内容も知りたい」といった声も少なくなかった。そこで『くにたち人類学研究』第6巻では、小さな教室の出来事をより多くの方とシェアするために、2名のゲスト（アンマリー・モル、キャスパー・イェンセン）のトーク内容の要約を掲載ことにした。これらは当日のトーク内容を後日ゲストにまとめていただいたものである。なお、翻訳はそれぞれの部会の参加者のひとり（モル部会：深海菊絵、イェンセン部会：寺戸宏嗣）が担当した。

*一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

いずれのエッセイもエッセンスが凝縮されている。研究テーマや領域にかかわらず、なんらかのインスピレーションを得ることができるのではないかと思う。また、私たちはこれらを日本の若手研究者に向けたメッセージとして読むこともできるだろう。この企画がゲストと読者の時空を越えた対話のきっかけを提供できればと思う。

最後に、『くにたち人類学研究』にエッセイを寄稿して下さったモル氏とイェンセン氏、ワークショップを企画し、日本の若手研究者に貴重な機会を作ってくださった春日直樹先生、そして有意義なトークをして下さった4人のゲスト全員の方々に、この場を借りてお礼を申し上げたい。私たちは心から感謝しています。